

「蜂と養蜂の文化誌」

生き物文化誌学会 第7回例会

誌上再現

2004年10月4日に静岡市で開催された、生き物文化誌学会第7回例会「蜂と養蜂の文化誌」にあたっては、ミツバチ科学研究施設として協賛し、また私自身はプログラム(p. 39 参照)の企画調整役として参加したこともあって、盛会のうちに終わったことは、本当にありがたいことであった。しかし、これだけの内容をもっと多くの人に聞いていただきたいとの思いは強く、またきちんとした記録に残すことの意義を大に感じたので、本誌上で、当日を再現する企画に至った。なお、このような試みは、本誌では初めてであり、普段とは誌面のスタイルが異なっていることはご容赦いただきたい。

冒頭は、生き物文化誌学会の常任理事で、司会の大役を務められた(株)クエンビーガーデンの小田社長に、主催者を代表して当日をふりかえっていただいた(p. 45)。続いて、当日行われた4題の講演(pp. 46~74)を掲載した。講演は録音テープから書き起こし、なるべく当日の雰囲気を残すように心がけたが、一方で講演で用いられた図をできるだけ引用するために、字句の調整を含め、全体の体裁を整え、これに講演者による最終校閲を加えて完成させた。最後には、当日会場で書籍の展示の他にこの例会のテーマに基づく数葉のポスター展示もあったので、一部を再録した(pp. 75~78)。

それぞれの講演の前に、この例会について多少の説明が必要と思う。生き物文化誌学会は、分子生物学的手法を多用する生物学の進歩に伴い、分子レベルの要素還元主義の台頭傾向を危惧する立場から、「あらためて自然の世界をふりかえり、生物と人との相互関係を、一定の社会や地域の文化における個別性に注目していく

とともに、比較分析を試みながら地域を超えた普遍性を探究していく智の拠として、『生き物文化誌学』を提唱する(設立趣意書より)」ものとして2003年5月に設立された。

生物と人を取り上げる立場から、文系・理系双方の既存の学問分野の縦横の協同を必要としている。このため学会自体が実に学際的で横方向に連携があり、また縦方向にも広がりが大きくて、職業研究者ではない会員が多いことも大きな特徴となっている。一方で、この学会が目指している「地域からの発信」は、次々と各地で開催される例会によって実現されている。

したがって、第7回例会は、開催地静岡の例会でもあったが、ミツバチを拠り所とする異種分野の集合体が発信するという、学問としての「地域」発信であったという方が、どちらかといえばじっくり来る会でもあった。

4題の講演はそれぞれ話し手の視点が異なり、すなわち、有用昆虫のひとつとしてのミツバチ、人のために役に立っているミツバチ、人に飼う楽しみを与えているミツバチ、地域の支援や一国の自然と文化の中のミツバチの4つ



講演に聞き入る参加者



討論会で壇上に顔をそろえた講演者

の角度であった。特に、有用性の高い昆虫として、ミツバチが産業的な方向性をもつ家畜化の波に乗ってきた生物とする前半の梅谷・松香両氏の講演と、「生き物」を楽しむための、しかも生業を放りだしてまで優先されるハチ飼いが、産業化を目指さないまま続けられているという佐治氏の講演とのコントラストが浮き彫りにされていた。このため講演終了後の討論会では、「家畜化」という言葉の定義が取りざたされるほどの熱心な議論の展開で、ミツバチの特殊性をあらためて確認することにもなり、ミツバチ関係者を中心としていた参加者から、大変高い評価を得ることができたように思えた。

学会の設立趣意書にもあるが、この学会の冠する「生き物」は「生物」とは異なって人を含むあらゆる生命体の多用なつながりを強調する概念である。私たちは、研究者として多くの場面でミツバチに対して、実験用の生物材料を使う立場で接している。しかし一方で養蜂を通じた村落開発や学校教育でのミツバチ利用の模索、あるいは趣味養蜂などに接する場面ではかなり異なった、つまりミツバチを「生き物」として、その向こうにつながっている人やその暮らしを、単なる研究者の枠にとらわれず、一個の人間として、強く意識することもある。

ミツバチと人とのつながりは、「ハチミツの歴史は人類の歴史」という言葉そのままの時間の流れの中で織り成されてきたものである。人類が登場したときにはすでにそこら中にいたミツバチを、私たち人類は、古くはハンティングによって、やがて5000年前からは飼育も始め



その討論会では熱心な討論が繰り広げられた

て利用し、技術の発達に伴って、150年ほど前に現在の飼育形態に到達した。ハンティングには地域性が見られる一方、時空を超えて収斂する「技」があり、また伝統的な飼育形態は、各地で独立多発的に発生したはずなのに、道具ひとつを見ても驚くべき類似性をもって、今日、各地にその姿を残している。

ミツバチ自体の位置づけも、狩猟の対象から、飼育可能な家畜へと変わり、また単にハチミツや蜂ろうといった古典的な生産物を供する家畜ではなく、ローヤルゼリーやプロポリスといった健康食品の生産者でもあり、また花粉交配によって農業生産を向上させる送粉者でもある。さらには社会の規範として学校教育で取り上げられたり、今日的には科学研究における実験動物としての位置づけも大きくなっている。

こうした変遷、拡大を背景に、さまざまな立場からミツバチに関わる人々が現れ、実に多様な「つながり」が具現している。ただ、このつながりが、既存の枠組みの中ではなかなか一堂に会する機会がないため、お互いの存在に気付くこともなく、結果として互いを理解するという次元にはたどり着けていなかった。

今回の例会は、おそらくその初めてのきっかけとして、あるべき形で実現したものだったともいえよう。この誌上再現で、その雰囲気少しでも多くの人に味わっていただければと思う。また今後もこうした会が、地域や分野からの発信として開かれ、より多くの人々のミツバチへの多角的な理解が深まることを願いたい。

(中村 純)